

人切取之間、腹中有珠、件珠所進上也。

〔親元日記〕寛正六年二月廿五日癸卯、小原刑部少輔殿伊勢國鯨荒卷廿、鳥二番、御返事整、松田文明十三年四月廿五日己巳、法光房鯨荒卷十進上、御返事あり。

〔廻國雜記〕七月十五日〇文  
明  
十  
八  
年  
中  
略、あふみ川〇後  
越かさ島など打過て、鯨なみといへる濱を行けるに、折節鯨の潮吹けるを見て、

わきてこむこの浦の名にたつ鯨波曇るうしほを風も吹なり。

〔御隨身三上記〕永正九年二月廿九日、鯨を可被下のよし、式部少輔殿より書狀如此、

夜前者申來候、本望存候、仍鯨藥上候、若御所望に可被下候尋可申之由、御懇之儀御面目候、御返事□重而可申候略○申

三月朔日朝は出仕不申候へ共、昨日廿九日、鯨之儀及晚參候、式部少輔殿へもまかり出候て、上意忝よし申候、四月廿九日、李部より書狀にて、鯨百被下由在之忝由申候、卅日、晝番に祇候仕候御用なし、李部を以、昨日の鯨の御禮忝よし申上候、

〔晴豐記〕天正十年二月廿七日、二條之御所參、伊勢一身田より禁裏へ三合三荷進上、桶二ヶ親王御方江くじらの桶一ヶ進上、余に鯨桶一ヶ、狗狀十帖、文箱一ヶ、入道殿へ鯨桶一ヶ、れうし卅帖、

〔駿清遺事〕慶長十六年五月廿一日久能濱へ鯨寄大サ十一間程有、

〔老の樂〕二月中旬頃より〇享保十九年行徳へ鯨貳本寄る、江戸より見物群集なす、わけて廿四日おびただしき鯨見物のよし、亥かも彼岸中日なり、但廿日歟、よみ賣に廿日として出す、

〔山陽詩抄三〕至佐嘉諸儒見要會飲有鯨肉之供、席上用所得韻戲作長句、  
巨鼈掀潮噴雪花、萬夫攢矛海門譁、肥海捕鯨耳曾熟何料鮮肉到齒牙、片片肪玉截芳脆、金鑾玉膾曷能加、他日所食非真味、鹽藏況經運路遐、君不見先侯戈鋌殪豕蛇、此物戢髻上鍊叉、多士方遭偃武日、